



棠花物語 中十八十六





榮花の法外十五



教

及乃御世の世にあらざりては
 此代よりなせぬ所の御世を
 もの世に御世の御世にあらざり
 折段や申されどもむも世に御
 してはなすしゆとす此代折段
 ぬいおの門と片の儀にあらざ
 身とち政士の位も御世にあら
 やまふくしゆとす世にあらざ

ちまのふん——

ちまのふん——

ちまのふん——

ちまのふん——

ちまのふん——

ちまのふん——

ちまのふん——

ちまのふん——

ちまのふん——

ちまのふん——

ちまのふん——

ちまのふん——

ちまのふん——

ちまのふん——

ちまのふん——

ちまのふん——

ちまのふん——

ちまのふん——

ちまのふん——

まよひのつかせにして信濃大原の地をこゝ
くせある七月廿九の文殊云くまひせぬ月
あまの命伝し慈光大原のこゝちをこしれしま
るまの申の初風涼し月あさる影のけむ
八月十日より十七日まで夜わあけこゝし
のほいしあまをこしとくしてうわたりかして
やうしたまをせぬ九月よこまひせぬく音水
をりしあまをこしとくしてうわたりかして十月
山階寺の維摩と云よまのこゝちをこしとくし
にせせあまけうらよれとくしてとくし

氏の所をこし不法寺のれくしの御建立の所を
まよひの一人をこしれをせぬ申しよまの
のこゝちをこしとくしてうわたりかして
くまの命のあまをこしとくしてうわたりか
し維摩長者のれをこしとくしてうわたりか
せんかまのこゝちをこしとくしてうわたりか
ふのこゝちをこしとくしてうわたりか
は神のこゝちをこしとくしてうわたりか
めまの命のあまをこしとくしてうわたりか
れをこしとくしてうわたりか

弟子大日如來太子正位存東明下道長前
白雲山淨土觀音言凡聞天上天下妙覺之理
猶同三千大千世界之悲普被佛法之冲邈不可得
而稱者也弟子自行馬至鳴車而立強仕不好狂
善企萬濟不思教始乳善修首弱冠着緋之暇後
先考大相國府詣木幡墓上作三堂瞻四域古塚疊
々幽塚寐之作儀不見只見春花秋月法音不覺只覺
淚多山嶽嶽余暇不覺淚下竊作世念我若向後至大位
事相諧者爭亦茲山脚造一堂撥三昧福即過去垢
弘方未思而涉歲不敢語人爰羨古堂業之塵浴皇

華之恩年三十極人臣之位十年奉王仇之任皇
帝之為舅也皇后之為父也榮餘於身費過於分
如履席尾如握毫鬚曰茲雖趨明廷治居初履發
善提心歡道場記仍住坐外事三室造以輿沛必一乘
柝檢家譜乃歲友之采所以卑碑百姓身理可無何
者姑祖內大臣授持宗廟保安社禮治海公者午章
詔勅筆制律令與佛法併帝心悅其後所紀善相積
功累范喜敏奉有德矣建興福寺法苑寺開功學院
施藥院忠仁公始長捐金昭宣公懇木構墓同信公建
法性寺終三昧九條右相首建揚徽院三昧先考建法

興院終三昧此外傍親列祖之善根法本不遺祚計
方今取之誦墳墓為建寺劫點形勝向被朽木則礙二
恩父母之廟壇間世嚴以布瘡同胞兄弟之芳骨沒
至孝鐘爰之子孫不徒晨昏雖近習舊勞之僕妾不
修陪侍山嵐胡掃庭深月秋奉燭而已仍自長保六年
二月一日結花痛債初心不材之亦企造普賢而刺
不拜且之忘匪右之所思書妙法而代立碑旌德之
文是以勵拙掌而弛筆迹以信為和午借毗者而
加意巧移孝礼為顏今日擇耀者始法苑三昧刻
十月定星之期迴芳代不朽之計丁取蒙而放開發日

暖可謂天地初合風雨不遠祀考感應冥冥助之令
然也別述奉書法花淨百部千抽般若心經百卷泥
百餘江賢匠象以書之花林七頃供養浮磬空蓋幢幡
以衣上服七珍百味供養長之演說之青苔鋪設自展
七洋瑠璃之茵紅葉亂飛暗成千花錦繡之化玉軸星
羅貝山崗山之積玉金言流布知提河之有令支寺座
者如東之博墓也實相者法弟之舍利也山城獨勝
有便於弘一業王舍不遠立煩於羣僚丹丘青像
忽具女末有奩包乃彩百泉皆唱妙法之梵音疑是靈
就鳥山之業五包雲心亮末預將若法童子池之發焉六種

動以涌出欲視耳耳未曾視轉目未曾轉被瑞本者魯
之賢士也移塚於孔子之墓傍王初者晉之室臣也
築寺於禮父之座世聚沙為以弘智嶽謾年大傳
之飽後胤伴槐棘以言法棟樑王蓋相之拜先堂里
白衣之云集豈唯三列五群之淺界內外戚之執從
亦亦見佛問法之大像功德遍子界利益及于衣生永軌
既為衣望亦足以世善迴向四恩天下安穩善新民仗業
教禮親迦新法大業妙光法吹普賢菩薩壇入世道場
證明功德天祥地祇及茲山出靈善神被如來之衣著
菩薩之座作彩之室增卷一念儀呼煖煖之木於

大智之日後夏蒼指之燈雷朽壤於其露之戸水半
播白蓮之粒却石雖礫彩主之戸不到芥城徽正之不
退之倫長情彩法存生上弘兜率西邁由法牙
子歸會袖首首教句

造法成寺之暇淨切德之次川先年事他打邊漢
彩文た史弁行成口法書之由有喜信抄抄淨妙旨
信善實凡二年也中江原出原以後年記相遠航

采花の宛才十六

中つた津也

寛仁三年四月許橋川の女所の家をたぬ
もつてたりもせしよおれりらんはら
とつたあつたつたつたつたつたつたつたつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
たはたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
らたつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
りたつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
まつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

いづれにせよしるすはらうとすいふ事のみは
いふもせよ女まに十に男まに十とすいふ世
にのしちのしちのしちのしちのしちのしち
らあはちちちししあはれは口はくめい
るはちちちちのしちのしちのしちのしち
しちのしちのしちのしちのしちのしち
しちのしちのしちのしちのしちのしち
しちのしちのしちのしちのしちのしち
しちのしちのしちのしちのしちのしち
しちのしちのしちのしちのしちのしち

しちのしちのしちのしちのしちのしち
しちのしちのしちのしちのしちのしち
しちのしちのしちのしちのしちのしち
しちのしちのしちのしちのしちのしち
しちのしちのしちのしちのしちのしち
しちのしちのしちのしちのしちのしち
しちのしちのしちのしちのしちのしち
しちのしちのしちのしちのしちのしち
しちのしちのしちのしちのしちのしち
しちのしちのしちのしちのしちのしち

母のそと

ちちのしちのしちのしちのしちのしち
ちちのしちのしちのしちのしちのしち
ちちのしちのしちのしちのしちのしち

の西のこ膝傍のこゝゆりしむあてぢせお
しうしうきうちのちのちのちのちのちのち
は神一とさゆりやうしむりしむりしむりし
んよぬちのちのちのちのちのちのちのち
うあつれちのちのちのちのちのちのちのち
まをいしむりしむりしむりしむりしむりし
とぬりしむりしむりしむりしむりしむりし
てぬりしむりしむりしむりしむりしむりし
れしちちんもちのちのちのちのちのちのち
とのねしむりしむりしむりしむりしむりし

大臣もあつちのちのちのちのちのちのち
はしちのちのちのちのちのちのちのちのち
あこのちのちのちのちのちのちのちのち
ひひのちのちのちのちのちのちのちのち
こじのちのちのちのちのちのちのちのち
うしむりしむりしむりしむりしむりしむりし
られしむりしむりしむりしむりしむりしむりし
えのちのちのちのちのちのちのちのちのち
らしむりしむりしむりしむりしむりしむりし
しむりしむりしむりしむりしむりしむりし

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in Arabic script, consisting of four lines of cursive writing.

Handwritten text in Arabic script, consisting of eight lines of cursive writing.





